

子宮癌腔内照射を受ける患者の看護 ～患者の苦痛に焦点をあてて～

Nursing of the patient treated with intracavitary brachytherapy in uterine cancer

～ Focus on the pain of the patient ～

西2階病棟

柳澤裕子 窪田里絵 遠山理江 細田かず子

放射線科医師 小岩井慶一郎

〈要旨〉子宮頸癌に対する腔内照射に関して、患者にアンケート調査を行い、患者が感じている苦痛と現在の看護師の関わりを明らかにした。患者は漠然とした恐怖や不安の中で治療に臨んでおり、治療中は「痛み」や「長時間の同一体位」に対して苦痛を感じていた。また、患者は看護師に「そばにいたい」「励まし」「声かけ」を望んでいた。患者が看護師に望む関わりは、現在の看護師が心がけている関わりと一致しており、今後の看護ケアの提供において参考になった。

キーワード：子宮頸癌、腔内照射、苦痛

I. はじめに

子宮頸癌は一般的に放射線の感受性が高いため、放射線治療が行われることが多い。照射の方法としては外照射と腔内照射の併用が標準的である。当院では年間約160例の腔内照射が行われている。岡本らは「小線源治療の利点は治療効果が高く、晩期（遅発性）有害反応の頻度を低く抑えることが出来る点だが、逆に体内に器具や直接線源を挿入するため、治療時に苦痛や痛みを伴うという欠点もある。」¹⁾と述べている。また、患者は載石位を長時間強いられるため羞恥心を伴う。そのため腔内照射は治療効果は高いが、身体的・精神的苦痛も強く、患者にとって負担が大きい治療と言える。近年、鎮痛剤の追加使用や鎮静剤、全身麻酔の導入により、身体的苦痛は軽減されてきている。しかし、当病棟は腔内照射の対象が外来患者や他病棟に入院中の患者であるため、安全面を考慮し実施前に鎮痛剤を使用するのみである。また、看護師の人員を固定できない状況にあり、十分な信頼関係が築けないまま処置の介助につくことにジレンマを感じている看護師が多い。そのため今回、患者が感じている苦痛、現在の看護師の関わりを明らかにし今後の看護ケアに役立てていきたいと考え本研究を行った。

II. 研究方法

1. 研究期間

平成23年11月～平成24年12月

2. 対象者

- 1) 平成23年～平成24年に子宮癌腔内照射を施行した患者30名
- 2) 子宮癌腔内照射の介助をしたことのある当病棟看護師30名

3. 方法

上記対象者に独自に作成したアンケート用紙を用いて記述式で調査を実施した。分析方法は単純集計とした。患者への質問は、治療前、治療中の苦痛や思い、看護師の関わりに関する内容10項目とした。看護師への質問は看護師からみた患者の苦痛や望まれている看護師の関わりに関する内容6項目とした。

III. 倫理的配慮

アンケートの回答は任意であり、無記名とし、個人が特定できないように配慮した。説明文書とアンケート用紙を渡し、アンケートの提出をもって同意が得られたとみなした。本研究は信州大学医学部医倫理委員会の承認を得た。

IV. 結果

1. 患者に行ったアンケート結果

患者の平均年齢は66.30歳であった。回収数は23名。回収率は76.6%であった。

1) 治療前

治療前に治療のイメージが出来た患者は48%であった。治療を行う前に不安を感じた患者は87%であった。不安の内容（複数回答可）は「未知の治療に対する恐怖」18%、「痛みへの恐怖」17%、「漠然とした不安」14%であった。（表1）

表1 照射前の不安要素

未知の治療に対する恐怖	14人	18%
痛みへの恐怖	13人	17%
漠然とした不安	11人	14%
副作用	9人	12%
情報が少ない事への不安	7人	9%
放射線被爆への恐怖	7人	9%
羞恥心	6人	8%
予後	4人	5%
外来治療	2人	3%
知らない医師・看護師	2人	3%
知らない病院で行う治療	1人	1%

2) 治療中

腔内照射前に鎮痛剤を使用した患者は96%。もっと疼痛緩和が必要と感じている患者は96%であった。その内容として「痛み止めを打っていたのにどうしてこんなに痛いのだろうと思ったが、痛み止めを打たなかったら、どんなに痛かっただろうかとも思う」「出来れば痛みを和らげて欲しい」などの意見が聞かれた。治療中に苦痛に感じたこと（複数回答可）は「痛み」42%、「長時間の同一体位」30%、「陰部を見せることへの抵抗感」10%、「孤独感」・「体感温度」・「看護師が途中で変わる」がそれぞれ6%であった。（表2）

表2 治療中に苦痛を感じたこと

痛み	21人	42%
長時間の同一体位	15人	30%
陰部を見せることへの抵抗感	5人	10%
孤独感	3人	6%
体感温度（寒さ）	3人	6%
看護師が途中で変わる	3人	6%

音楽	0人	0%
看護師との信頼関係がない	0人	0%

看護師の関わり（複数回答可）については、「付き添ってもらって安心」66%、「看護師によって対応が異なる」16%、「看護師が途中で変わることが不安」13%だった。その内容としては「女性がいてくれることで安心、言葉をかけてもらってうれしかった」、「良い対応をして頂き安心していました」、「毎回同じ看護師の方だともっと安心です」、「1回だけ治療がわかっていないような方がついたことがある」などの意見が聞かれた。（表3）

表3 治療中の看護師の関わり

付き添ってもらって安心	21人	66%
看護師によって対応が異なる	5人	16%
看護師が途中で変わることが不安だった	4人	13%
声をかけにくい	2人	6%

看護師にして欲しい関わり（複数回答可）は「そばにいて欲しい」24%、「疼痛緩和」22%、「励まして欲しい」18%、「声かけ」15%であった。その内容としては、「手を握ってもらい、励ましてもらいありがたかった」、「そばに看護師さんがいて、声をかけてくれば安心していただける」、「励まし、声かけをして頂きましたので安心して治療できたと思っています」などの意見が聞かれた。（表4）

表4 看護師にして欲しい関わり

そばにいて欲しい	13人	24%
痛みを和らげて欲しい	12人	22%
治療中励ましてほしい	10人	18%
声かけをしてほしい	8人	15%
同じ人が担当して欲しい	7人	13%
経過の説明	5人	9%

2. 看護師に行ったアンケート結果

回収数は21名。回収率は70%であった。腔内照射中の患者の苦痛として考えられること（複

数回答可)は、「痛み」31%、「陰部を見せることへの抵抗感」26%、「長時間の同一体位」23%、「看護師との信頼関係がない」12%であった。(表5)

治療中の看護師が意識し行っていること(複数回答可)は「声かけ」39%、「そばにいて手を握る」26%、「経過の説明」24%であった。(表6)

痛み止めについては「効果が少なく十分な除痛ができていない」52%、「分からない」31%であった。今後、必要な関わりは何かという問いに関しては「少しでも不安が軽減されるように声かけを行いたい」、「鎮痛剤や鎮静剤を使用し痛みを緩和させたい」、「患者の情報が少ないため外来、病棟、医師、看護師間の情報交換が必要」、その他に「業務の間に複数の看護師が交代で介助している現状があり、本当に患者のことを思って関わりができていないか、自信がない」などの回答が得られた。

表5 患者の治療中の苦痛

痛み(治療中の)	20人	31%
陰部を見せることへの抵抗感	17人	26%
長時間の同一体位	15人	23%
看護師との信頼関係がない	8人	12%
孤独感	2人	3%
体感温度(寒さ)	2人	3%
看護師が途中で変わる	1人	2%
音楽	0人	0%

表6 治療中の看護師の関わり

声かけをしている	18人	39%
そばにいて手を握っている	12人	26%
経過を説明している	11人	24%
励ましている	4人	9%
その他	1人	2%

V. 考察

腔内照射は特殊な治療法であり、治療前に医師から受けた説明で治療の様子をイメージできた患者は約半数である。そして、多くの患者は漠然とした恐怖や不安の中で治療に臨んでいた。

藤本は「放射線療法という未知の治療に対す

る受け止め方は、患者によってさまざまである。」²⁾ また、「放射線という言葉からよくないイメージを抱き不安になる。」³⁾ と述べている。このことから、治療前の説明は、パンフレットを用いて治療のイメージをつきやすくし、患者が不安に思っている内容を確認しながら、ゆっくりと進めて行く必要がある。また、治療説明の際には、医師や外来看護師と連携を充実させ、不安の軽減に努めていくことが課題である。

治療中の苦痛としては「痛み」「長時間の同一体位」が上位を占めている。「もっと痛みが取れた方がよい」と回答している患者が大多数である。このことから、医師と共に現在行っている除痛方法を再評価し、処置中は安楽な体位が保持できるよう改善していくことが必要である。

また患者が看護師の関わりで望むことは、「そばにいないこと」「励まし」「声かけ」であった。岡本らは、腔内照射に対して「患者さんに治療前に十分に説明をしておくことはもとより、治療時には看護面からも患者さんの状態把握や声かけをすることによって、精神的にも苦痛を和らげるための対処が重要になる。」⁴⁾ と述べている。今回の結果より患者は、看護師が付き添うことで安心感が得られ、苦痛の緩和に繋がっていると考える。看護師のアンケート結果も患者が感じている苦痛と看護師が思う患者の苦痛の内容はほぼ一致していた。また、患者が望む看護は現在看護師が提供している看護と一致しており、患者の苦痛軽減に役立つケアが提供できていると考える。この結果から現在ジレンマを感じながら実践している看護に自信が持てた。しかし一方で、看護師の対応が異なることや複数の看護師が交代で担当することに不安を感じている患者もいることが分かった。勤務体制の見直しや情報共有の仕方などを工夫していく必要がある。今回の研究を通して、外来と病棟間で十分に連携し、患者の不安軽減につとめ、患者が期待する看護ケアがどの看護師も一律に提供していける対策が望まれることが明らかになったと考える。

VI. 結語

1. 患者は十分なイメージができないまま不安や恐怖の中で治療に臨んでいる。
2. 患者は、治療中の痛みや同一体位に苦痛が

あり対応が必要である。

3. 治療中、患者が看護師に望むことは「そばにいること」「励まし」「声かけ」であり、現在看護師が提供している看護と一致している。

VII. 課題

今後は、腔内照射に関するパンフレットの作成やマニュアルの見直しにより、患者の不安を軽減できるようなケアを行っていき、医療者間の情報交換と連携の充実を図り、患者への関わりを継続できることが課題である。

VIII. 引用文献

- 1) 岡本欣晃, 佐々木良平 監修 菱川良夫: 看護の力でQOLを向上させる! 放射線治療を受ける患者の看護ケア, 37p, (株) 日本看護協会出版会, 2008年6月
 - 2) 濱口恵子, 久米恵江, 祖父江由紀子, 土器屋卓志: ベスト・プラクティス コレクション がん放射線療法ケアガイド, 76p, 株式会社中山書店, 2009年2月
 - 3) 濱口恵子, 久米恵江, 祖父江由紀子, 土器屋卓志: ベスト・プラクティス コレクション がん放射線療法ケアガイド, 78p, 株式会社中山書店, 2009年2月
 - 4) 岡本欣晃, 佐々木良平 監修 菱川良夫: 看護の力でQOLを向上させる! 放射線治療を受ける患者の看護ケア, 37p, (株) 日本看護協会出版会, 2008年6月
- ## IX. 参考文献
- 1) 岡本欣晃, 佐々木良平 監修 菱川良夫: 看護の力でQOLを向上させる! 放射線治療を受ける患者の看護ケア, (株) 日本看護協会出版会, 2008年6月
 - 2) 小倉啓宏: 新体系看護学 4 疾患の成り立ちと回復の促進② 治療法概説, 株式会社メヂカルフレンド社, 平成19年
 - 3) 片渕秀隆, 田代浩徳: 看護のための最新医学講座〔第2版〕16 婦人科疾患, 株式会社, 中山書店, 2006年
 - 4) 川村有美ら: 腔内照射時の苦痛の軽減 体験者(患者)と看護婦模擬体験, 川崎市立川崎病院院内看護研究集録51回, 1997年
 - 5) 末岡 浩: 系統看護学講座 専門13 成人看護学9, 第12版, 株式会社医学書院, 2008年
 - 6) 徳重涼子ら: 子宮腔内照射治療を受ける患者の思い, 山口県母性衛生学会会誌, 27巻, 2011年
 - 7) 濱口恵子, 久米恵江, 祖父江由紀子, 土器屋卓志: ベスト・プラクティス コレクション がん放射線療法ケアガイド, 株式会社中山書店, 2009年2月
 - 8) 南裕理香ら: 子宮癌における組織内照射に対する看護 組織内照射中の患者の苦痛を明らかにして, 国立病院総合医学学会講演抄録集62回, 2008年